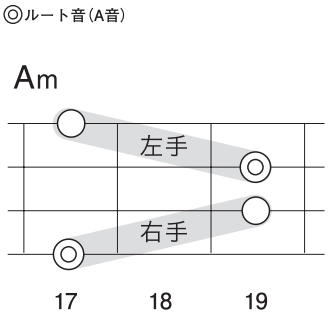
注意点1 理論

ルートの押さえ方で変化するコード・タッピング

左手で4弦のルート音を押さえるタッピングは、左手の手の平が1＆2弦上に来るので、右手のタッピング・ポジションが左手から離れた位置になる。そのため、ギターのように近いフレットを使って、コードを組み立てることができない。しかし、右手で4弦のルート音を押さえるスタイルでは、左手で右手の真下のフレットを押さえることができるため、コードを幅広く作れるのだ。また、右手と左手のタッピング・ポジションが近いので、両手の動きを目で見て確認しやすい（**図1**）。ただし、ハイ・ポジション中心になるため、ルート音の音域がそれほど広がらないので、オリジナル・フレーズを作る際には気をつけよう。

図1　右手で4弦のルート音を押さえるパターン



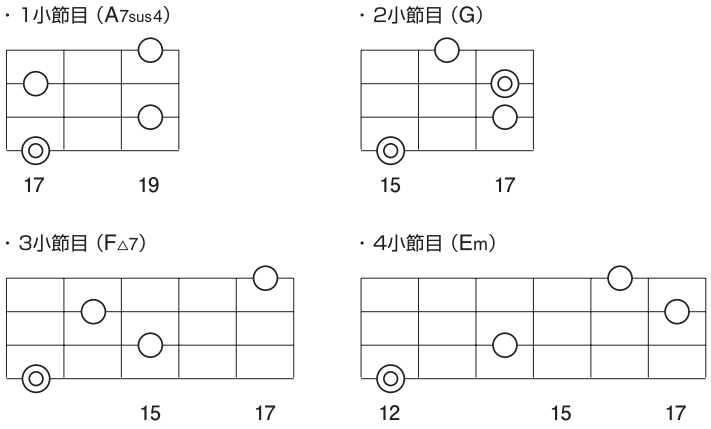
左手の自由度が増すため、コードを幅広く作ることができる。

注意点2 理論

1&2弦で鳴らすコード・トーンを確認せよ！

メイン・フレーズは、右手人差指が4弦のルート音、中指が3弦の5度を担当し、左手を使って1&2弦のコード・トーンをタッピングする。**小節ごとにコード・トーンが変わる【註】**ため、左手のポジションも細かく変化するので気をつけよう（**図2**）。具体的には、1小節目（A7sus4）は2弦がm7th、1弦が4th、2小節目（G）は2弦がオクターブ上のルート音、1弦が3rd、3小節目（F△7）は2弦が△7th、1弦が5th、4小節目（Em）は2弦がm3rd、1弦が5thとなる。このフレーズをヒントにしながら、ぜひコード・フォームを探してみてほしい。コードをたくさん覚えれば、フレージングの幅も一気に広がるぞ！

図2　メイン・フレーズのコード・ポジション



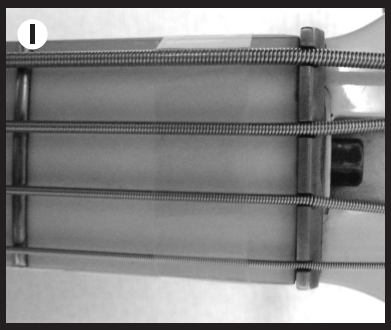
～コラム24～

将軍の戯れ言

どんな奏法においても不要弦を的確にミュートすることは、非常に大切である。しかし、タッピングは右手が弦から離れることが多いので、ミュートが掛けづらい。そのため世の中のギタリストやベーシストは、タッピング時に独自のアイディアでミュートを掛けているのだ。ここでは、ミュートのアイディアをいくつか紹介しよう。

筆者がよく見かけるのが、髪の毛を束ねるゴムバンドを使う方法だ。あらかじめナット付近にゴムバンドをはめておき、タッピングを弾く直前にゴムバンドを指板上にズラしてミュートを掛ける。マイケル・ジャクソンやジェフ・ベックのサポート・ギタリストでもあったジェニファー・バトンは、ゴムバンドを発展させたような方法を採用していて、ギター本体にミュート専用レバーを付けていた。ちなみに、筆者はレコーディングでは、ネックにテープを貼り付けたり、レコーディング・スタッフにネックを軽く握ってもらって、余計な振動を抑えることがある。一生懸命弾いた大切なフレーズは、やはりクリアなサウンドで聴いてもらいたいものだ。ベーシストとして上を目指すならば、音を的確に鳴らすということと同じように、余計な音を鳴らさないことにも心配りをすることが大切なのである。

身近なアイテムでノイズを完全カット！ベーシストのためのミュート・アイディア集



ロー・ポジションにテープを貼るのも有効なミュート方法となるのだ。

【小節ごとにコード・トーンが変わる】 コードの明暗を決定する3rdやコードの進行感や響きのオシャレ感を生む出す7thは、非常に大切なコード・トーンだ。ミス・タッチのないように的確に鳴らそう。